

## 新古今歌人による『白氏文集』受容

―『文集百首』から―

札幌大学文化学部助教授 田中幹子

本発表は、鎌倉初期の新古今歌人である慈円と定家によって詠まれた『文集百首』に見られる『白氏文集』の受容を考察したものである。

『文集百首』の『白氏文集』の受容の状況は、平安時代の受容とは大きく違う。それまでほとんど触れられることのなかった閑適詩・感傷詩から多くの題を選んでいる。

これは隠遁生活への強い憧れを持ちながらも、最後まで官僚として生きていった白居易の人生に慈円が親近感を持ったためである。それは、九条家の柱としての重責をつねに感じながら、遁世に憧れる彼の気持ちでもあった。しかも、それ以前の文学は『白氏文集』に学び、吸収するという姿勢であったのに対し、慈円のそれは漢詩に和するといふいわば互角の姿勢で臨んでいる。よって作られた和歌は、漢詩句題をどこまでも契機として、あくまでも自己の

感情の発露として詠まれている。

対し、専門歌人としての誇りを持つ定家は、漢詩句題を結題の手法で読み、己れの感情をださず、物語的色彩を込めた芸術作品として作り上げた。

## Arthur Waley の白居易 「訳」について

札幌大学文化学部教授 張偉雄

アーサー・ウェイリー (Arthur David Waley) (1889年8月19日～1966年6月27日) は、イギリスの東洋学者である。1910年、ケンブリッジ大学を卒業し、その後の1913年より大英博物館に勤務する。当時、日本語の辞書を含む資料等が入手困難な時代に日本語と中国語を独学で習得し数々の翻訳を行なった。彼の翻訳は今でも英語圏で広く読まれており、日本語・古典および中国語古典研究の先駆者とされている。